三五五号　平成二十四年二月二十日　――長崎歴文協短信――

ながさきの空

私の思い出の長崎の街

古川　貞子

私が現在住んでいるところは旧榎津町五〇番地（現万屋町一――一三）なのです。私は昭和二年一月二十五日この地に生を受けました。曽祖父は私に「この子は持物を置いて来たんだね」と私が男の子として生れるのを望んでいたのですが、神様は私を女の子として古川家の初孫として生まれさせ、育てられました。

その頃の家業はカマボコ屋でした。江戸時代までは榎津町あたりまで潮が満ちて曽祖父の子供の頃は家の前で海水浴をして居たそうです。そして町内にある十軒程の家全部が魚屋さんだったそうです。

私の家の玄関には今も石臼があります。曽祖父は十五才のときから、夏の頃川むこうの材木町にあった魚市からエソやグチやハモ、イカ等を仕入れて家に帰り、早速魚の身を石臼で搗いてすり身をつくり、板付カマボコやすり身を竹の棒に巻きつけて、玄関にあった長い火鉢の上でぐるぐると手で廻しながら、竹輪カマボコを製作していたのだそうです。

旧榎津町（現万屋町）

それから「ハンペン」と言って、山芋をすった汁と魚のスリ身とをあわせ、それを蒸して柔らかな美味しい物をつくっていました。

私はそのハンペンを酢醤油で食するのが好きで、とても美味しかったのを今でも覚えています。

特に、このハンペンを夏の暑いときに食べるのは、とても美味しかったのです。又板付カマボコの売れ残ったのを板よりはなし、木綿の糸で吊し、天日で充分に乾燥させ、それを鰹節のようにけずって食べるのは又格別で鯛の花みたいでした。此の「ケズリかまぼこ」は長崎の料亭からも多く注文があり「古川のカマボコは捨てるとこがなかね」と得意顔をし、自慢していた曽祖父の顔を私は今も思い出します。

私達子供達のママゴト遊びにも、曽祖父は小さい竹輪カマボコや板付カマボコをわざわざ作って下さいました。私達子供の遊びのためにも、本物を食させて下さっていたのです。そして友達も、私の家では、ままごと遊びにも本物を食させてもらっていた事を今も思い出し、「古川さん所でままごと遊びをすると、本物のカマボコが食べられたので、とても楽しかった」と先日も語り合いました。

私も84才ともなれば、昔あそんでいた友が一人なくなり、二人なくなり、曽祖父のカマボコの味を知っている友達も殆ど居なくなりました。

曽祖父は昭和七年三月二日、七十四才でこの世を去り、其の後戦争が始り、だんだんと魚や品物も少なくなり、若い人達は戦場に出征して行き、昭和十三年には店を閉じてしまいました。

私達は母方の実家のある立山町九二番地に移転し、カマボコ屋をしていた榎津町（今の万屋町一――一三）を貸家として貸すことになりました。

戦後、長崎の町にもカマボコ屋さんが多くさん出廻って来ましたが、全部機械で出来るようになったのも時代の流れなんでしょう。おいしい魚に恵まれた長崎の町ですから、今もおいしいカマボコが出廻る様になりましたが、曽祖父が製造して居ました干カマボコは一軒も作っておられないようですね。

曽祖父は晩年、天皇陛下に此の干カマボコを献納して死にたいと何時も申して居りましたが、残念ながら時間がなく、去ってしまいました。でも私は今でも、自分で色々の物をつくっていました曽祖父の考えの深さや、手造りの立派な味には心をうばわれます。

曽祖父は、しけで魚がとれなかったとき、ぶらっと浜ぶらしたりして、網物屋の前で、そこの職人が餅あみや、ハイイラズ棚などを作っているのを見て家に帰り、見よう見まねで其の餅あみやハイイラズを造ったのが、今も家に残っているのです。それは私の母が、この曽祖父の作品を大切に保存していたからです。私も未だに大切に保管してます。本当に器用だけではなく、頭も良かった人だと親類の人々が今でも言っています。

昔の人は、物がなければ、考えを深めて工夫して暮すし、不足すればまた考えてみち足りるよう工夫し、働いていた日本人の心を尊く思います。

私も現在、物造りに「帽子造り」を撰んだことを誇りに思っています。

又、私が今でも「帽子造り」を人に教えたり、製作する事が出来るようになった事については何か曽祖父に教えられるものがあったのではないかと感謝して日々を送っています。

私が女だったから戦争にも行かず、命が長らえたのでしょう。曽祖父が望んでた男の子であったら、戦争に行って国の為に戦ってこの世には存在しなかったかもわかりません。

又、私は六十六年前、昭和二十年八月九日原子爆弾で三菱兵器工場があった茂里町で被爆しました。其の時のお友達の大部分の方がこの世を去られました。私はこの時、事務用の机の前で書類整理をしていましたので、机の下に体を入れて一命を失うことなく現在まで命長らえられたのも、曽祖父の陰の力があったのだと私は信じています。

何時までも、此の古川の家を絶さないで五代目・六代目と平和の長崎の町を継いで行かねばならないとの信念で毎日を感謝の気持で送らせて戴いております。

平成二十三年夏　（婦人帽研究家）

風信

○今年は長崎歴史文化協会を十八銀行清島頭取の全面的な御援助で、昭和五七年五月創立して戴いてより三十年となる。そして年刊誌「ながさきの空」も発刊させて戴いてより二十三集となった。

○今年の「ながさきの空」（二十三集）は、二月に発刊できましたので、御希望の方は本会事務局まで御連絡ください（無料・送料各自）。

○二十三集の内容は、毎月の「ながさきの空」に会員より投稿いただいた十一編と平野、北川、一瀬他各氏より寄稿して戴いた随想、先年より恒例となりました本会「古文書会」が昨年中に整理された松本良順の『養生法（上）』を掲載しました。

○一月二十三日夜六時、長崎ランタン・フェスティバル開催。点燈式あり、二月六日まで美しい長崎の夜を楽しむことができました。

○長崎ランタン・フェスティバルは中国の元宵祭（ジョングワン）に始まっている。元宵祭の事を昔は長崎では上元と言った。「上元」の詳しい事は古賀十二郎の「長崎市史風俗編・第四章」をみられるとよい。また、一八〇〇年頃長崎で編集された「長崎名勝図絵」にも次のように記してある。「上元は一月十五日（旧）、当日の夜、唐人屋敷内にては蛇踊あり。蛇頭より尾に至るまで龍の中に火を點じ之を舞う。最も珍しき物なり」。

○元禄二年（一六八九年）唐人屋敷が造られる以前は、長崎の街中や唐寺では、大いに「上元」の祝いが行われていたそうである。

○今年の節分は二月三日（旧一月十二日）で翌日は立春となる。節分の夜は、何処も豆まきに始るが、長崎では豆をまく男衆の後に、シャモジを持った女衆が後につき、「鬼は外、福は内」の声にあわせて「尤も、尤も」と言ってついてきたそうである。各室の「豆まき」が終ると、昔は火吹竹に豆を入れ、戸外に投げて入口の戸を閉じ、其の後、大根で白鼠を作り、其れをお盆に載せた物を持った子供達が家に来て何かもらって帰っていたのも思いだす。そして、その夜には鬼の手の赤大根、鬼の目の金柑、尺八イカ、鯨の百ひろ、金がしら、お雑煮を子供の頃たべた事を思いだしている。

○三月からは暖くなるので本会主催の左記の講座を再開。ご自由に御参加下さい（会費不要・資料代は各自）

長崎学研究集会（毎週月曜午前十時半より）各講師の自由発表

水曜懇話会（毎週水曜午後一時半より）竹之下氏を中心に江口・山脇・田村・吉田・野口・福島・末永氏等

古文書を読む会（月二回・第一・第三火曜日午前十時半より）（講師・世話人宮田・川原・宮田（女）・久保・犬尾・山口の各氏）

長崎の食文化を考えるサークル（月二回・第二・第四金曜午後二時より三時半まで）脇山壽子女子を中心に。

カット　中村　繁勝　なんばんえびす

長崎歴史文化協会研究室
TEL八二一一一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F